

 書評

綾屋紗月, 熊谷晋一郎 著

発達障害当事者研究

ゆっくりていねいにつながりたい

内山登紀夫

これは単なる私的記録ではない。普遍的な価値をもつ「研究書」だ。

著者の綾屋氏は、2006 年にアスペルガー症候群の診断を受けた二児の母、熊谷氏は脳性まひの当事者で小児科医である。

感覚情報処理の問題は従来、自閉症スペクトラムに比較的特異的な特性であるとされながらその診断学的位置づけが明確にされず、本格的な研究も少なかった。その理由としては、感覚情報処理の偏りが客観的に観察できる事象(たとえば、耳ふさぎ)にとどまらず、主観的に語られる場合が多く「客観的なデータ」が得られにくいこと、感覚の偏りの在り方が非常にまちまちで年齢や個人によるバリエーションが大きいことなどがあげられよう。

このように専門家には手をつけにくい領域に著者は果敢に取り組み、自己の内部感覚を綿密、冷静に観察し、思索を重ね、多数派にも理解可能な文章という形を与えることに成功した。文体は感覚的で明晰であり、独りよがりの部分は全くなく、読者は著者の体験を実感とともに追体験できる。たとえば、育児のなかで著者の行動に子どもが反応する時の著者が語る内的体験。

《このようなときに、私は「ヒトとつながっている」という実感を得る。自分のみぞおちがギュッとつかまれてドキドキして満たされる感じがして、子どもが自分にしゅっと乗り移って、じわじわと自分のなかに溶けていく感じた。》

このような魅力的な文章が満載されているだ

けでも、本書は十分に読む価値があるのだが、もちろん自閉を語る際にも著者の才能は発揮される。自身の体験をもとに〈身体の自己紹介〉〈したい性〉〈せねば性〉〈夢侵入〉など、著者独自の魅力的な概念が提唱される。

このような独自の概念は独りよがりになりやすいのだが、第三者が理解できるように体験談を交えた丁寧かつ明解な解説が加えられているために、ことごとく分かりやすく「なるほど、なるほど」とストンと腑に落ちる。優れた知性と誠実な思索の積み重ね、心理学など関連諸科学の知識の存在を確かに感じる。熊谷氏が脳性まひ当事者の視点から、綾屋氏の経験と対話を重ねたことも本書に深みを与えた。

評者は本書を読みながら、「この体験は〇〇さんに似ている、××さんが言わんとしていたことはよく分からなかったけど、もしかしたらこういうことかも知れない」、「あの症状は〈したい性〉が立ち上がらないことで説明がつくかも」などと、実際に関わっているアスペルガー症候群の人を連想することがしばしばあった。

本書は当事者の私的体験の記録ではなく、書名のとおり優れて普遍的な価値をもつ「発達障害当事者研究」である。ぜひ一読を勧めたい。読書の快楽を味わいながら障害の意味について、「多数派とは、少数派とは何か」について考えさせられる刺激的で貴重な体験になるだろう。

(よこはま発達クリニック所長・児童精神科医)

●A5 220 頁 2008 定価 2,100 円(本体 2,000 円+税) 医学書院